

札幌市における尿スクリーニング で発見された3症例

武田武夫 服部拓哉 (国立札幌病院(北海道
ガンセンター)小児科)
高杉信男 佐藤泰昌 佐藤勇次
(札幌市衛生研究所)

札幌市において昭和56年度に乳児尿による神経芽腫のスクリーニングを開始してから現在までに3名の本症患者が発見されたのでその経過を報告する。

症例1. 昭和56年8月23日生まれの女児

昨年の本研究会で報告したのと同一症例である。8カ月時に尿スクリーニング陽性で5月24日当科に入院、腹部CTで右副腎に一致して内部に不規則な石灰化像を示す腫瘤を描出したため(図1)6月8日に手術、病期は1期で組織学的には神経節芽腫であった。血管浸潤がみられたため、6カ月間James療法を施行し、以後は月1回24時間尿についてVMA, HVAの測定を行っているが、経過は良好である。尿VMA, HVAは手術直後より正常値に戻った。

症例2. 昭和57年2月17日生まれの女児。

患児は第1子で家族歴、出生歴に特記すべきことなく、6カ月目の尿スクリーニングでVMA, HVAの高値を認め10月25日精査のため当科に入院となった。

生後8カ月で入院、外見的には触診上異常所見なく、血圧のみ150-80mmHgと高かった。

24時間蓄尿でVMA 107 $\mu\text{g}/\text{mg Cr}$, HVA 128 $\mu\text{g}/\text{mg Cr}$, 血清LDH 696 U, 胸腹部および全身骨格のレ線像でも異常所見を認めなかった。

IVPで右腎の下方への偏移をみ、CT像で肝への多発性転移、右副腎部の腫瘤が描出された(図2)また骨髓血に異常細胞を8%みた。11月11日手術を行った。右副腎原発の4×3×2.5 cm, 23gの腫瘤を全摘出したが、肝十二指腸靱帯部にリンパ節腫脹があり、また肝転移巣はそのまゝ残った。病理学的には小円形細胞型であった。術後直ちにEDX, VCRによる治療を開始し、現在24時

間尿中のVMA, HVA値は正常に戻り、2月7日に行ったCT像では肝転移巣の明らかな縮小がみられている。患児は治療続行中であり、全身状態も良好に経過している。

症例3. 昭和57年4月3日生まれの男児。

家族歴、出生歴に特記すべきことなし。新生児期に肺拡張不全があり、治ったあと胸腺肥大で定期的に病院を訪れていた。

生後7カ月時、尿スクリーニングで本症を疑われ、精査のため57年12月6日当科に入院した。初診時、触診により左上腹部に深く、境界不明瞭、手拳大の硬い腫瘤を触知した。24時間尿のVMA 51.1 $\mu\text{g}/\text{mg Cr}$, HVA 60.8 $\mu\text{g}/\text{mg Cr}$, VLA 0.9 $\mu\text{g}/\text{mg Cr}$ と高値を示し、腹部CT, エコー像でも同部に石灰化を伴う腫瘤を描出した(図3)。血管造影で横隔膜との癒着を完全には除外できないということから術前にDEX大量療法を行った。1月12日の尿でVMA 35.2 $\mu\text{g}/\text{mg Cr}$, HVA 54.0 $\mu\text{g}/\text{mg Cr}$ と減少し、14日開腹手術を行った。後腹膜原発の6×4.5×3.5 cm, 45gの腫瘤を摘出した。この腫瘤は腹腔動脈、上腸管膜動脈を巻き込んでいたため、前者は切断、後者は剝離して腫瘤を切除したが大動脈周囲に腫瘤は残存した。術後より十二指腸の穿孔を生じ、このため1月22日死亡した。

以上より問題点の1つはスクリーニングの時期であり、症例2, 3では既に大血管の巻き込み、転移などがみられていた。この点に関しては治療剤への反応とも考え併せて今後さらに検討したい。

次に精査にまわった場合の診断手技についてどこ迄やるかであるが、症例1, 2では触診で分らなかった。特に症例1ではIVPで診断つかず、念の為にを行ったCT像で初めて診断されたことから、以後は腹部CTまで行っている。

第3に治療をどこ迄やるかであるが、目下の所、晩発性障害の可能性を考えてEDX, VCRによる化学療法のみにとどめている。手術による切除であるが、第3例のような合併症も考えると、少しでも危険のある場合にはむしろ生検のみにとどめて、あとは化学療法を主体とすべきであると考えている。



図 1. 症例 1 の腹部 CT 像
右副腎に一致して石灰化を伴う腫瘤を認める。

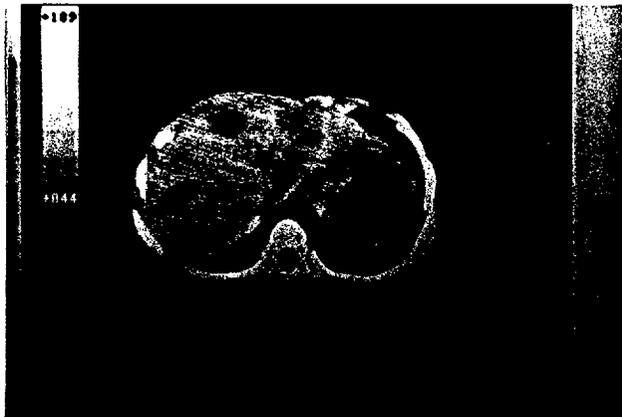


図 2. 症例 2 の腹部 CT 像
多発性の肝転移を認める。これでは原発巣は良く分らない。



図 3. 症例 3 の腹部 CT 像。
左後腹部より生じた大きな腫瘤を認める。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



札幌市において昭和 56 年度に乳児尿による神経芽腫のスクリーニングを開始してから現在までに 3 名の本症患者が発見されたのでその経過を報告する。